

「史料に含まれる虚構の要素」との相互関係に目を向けることは重要であり、今後、そうした観点から様々な新しいアプローチが試みられるであろう。

(1) L・ランケ、林健太郎訳『ランケ自伝』岩波書店、一九六六年、八四頁。

(2) 佐藤真一『ヨーロッパ史学史』知泉書館、二〇〇九年、二三九頁を参照せよ。

(3) M・ブロック、松村剛訳『歴史のための弁明』岩波書店、二〇〇四年、四五頁。
C・ギンズブルク、上村忠男訳『糸と痕跡』みすず書房、二〇〇八年、九一―一〇頁も参照せよ。

(4) N・Z・デーヴィス、成瀬駒男／宮下志朗訳『古文書の中のフィクション』平凡社、一九九〇年；R.W. Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, Cambridge, 1981; D.W. Sabean, *Power in the Blood*, Cambridge, 1984.

早稲田で考古学を学んで

小野 本 敦

私は本学の考古学専攻を四年前に修了し、現在、埋蔵文化財専門職員として自治体で勤務しながら大学院博士後期過程で学んでいる。今回の発表者の中では異色の経歴であるが、私の考古学専攻での生活・現在の仕事・またなぜ大学院に戻ってきたのかなどを記すことで、考古学の魅力を少しでも感じてもらえたら幸いである。

歴史学を志したことに何か大きな契機があったわけではない。祖父が小学校の社会科教諭をしていたことや、奈良県に親戚がいてよく遊びに行った事などが漠然とした歴史に対する興味を育んだのだと思う。運よく早稲田大学に進学できたのも、私が受験した当時は受験科目が国語と英語と小論文だけで科目数が少なかったからである（受験の日本史は苦手であった）。

専修進級時には日本史か考古学かで悩ん

だが、結局、「発掘」というものを経験してみたいという単純な理由で考古学を選んだ。私の遺跡現場デビューは、三年生に進級する春休み、先輩に紹介してもらった、大阪市立大学によるメスリ山古墳の測量調査である。奈良県にあるメスリ山古墳は墳長二三五mの古墳時代前期の大型前方後円墳である。測量調査とは学生数人で班を作り、手分けして測量図を作成していくのだが、最後にすべての図面を重ね合わせ、一個の古墳の図面が完成した時には、まるでこの古墳を制圧したかのような達成感を覚えた。この調査が古墳時代を本格的に勉強するきっかけになった。

大学院修士課程の時には、東京都狛江市にある土屋塚古墳の発掘調査と報告書作成の機会を与えていただいた。土屋塚古墳は墳丘四〇mほどの古墳時代中期の円墳であり、墳丘には埴輪が樹立されていた。近畿地方の大型前方後円墳とは比較にならない小規模な古墳だが、この古墳が調査されるまで、東京の多摩川中流域には埴輪をもつ

中期古墳はほとんど存在しないとされてきたことを思えば、小さくても非常に重要な古墳である。この調査を機に東京の古墳時代の見方も少し変わったのではないかと自負している。私の研究者としての糧となった調査である。

大学院修士課程を修了後、東京都内の自治体に埋蔵文化財専門職員として採用され、現在に至っている。埋蔵文化財専門職員の仕事には、史跡整備に伴う学術的発掘調査、土木工事などによってやむを得ず埋蔵文化財が破壊されてしまう場合の緊急的発掘調査、遺跡の現場見学会や土器作り体験などの市民が文化財と触れ合うイベントの開催などがある。遺跡の現場見学会などで市民の方々が実際に遺跡に触れ、目を輝かせている姿を見ることができるのは、学生時代には味わえなかったやりがいである。ちなみに埋蔵文化財専門職員になるには、学芸員の資格を取得後、各自治体が実施する採用試験を受けるのが一般的である。考古学専攻を目指す方は進路の一つとして考えて

みてはいかがだろうか。

私が働きながら再び大学院に進学しようと思った動機は二つある。一つは、私の所属する自治体は奈良時代の遺跡がメインであり、私のそれまで専門にしてきた時代とは微妙にずれるので、もっと勉強が必要であると思ったことである。もう一つはこれと関連するが、私がこれまで勉強してきた古墳時代から、現在仕事でかかわっている奈良時代までを一つの研究成果としてまとめたいと思ったからである。古墳時代から奈良時代と言えば、日本における国家形成期である。この時代に関する従来の研究は、大型前方後円墳が密集し、宮都が営まれる畿内に偏重していた。それは一面では真理であるが、では「地方」は「中央」の変革をただ受け入れるだけの存在だったのか？否、「地方」には「地方」独自の対応があったのであり、「中央」と「地方」を対等に照射してこそ国家形成期の社会像が浮かび上がるのではないか。これは私が土屋塚古墳の発掘調査以降持ち続けている思いであ

る。

現在、休暇や夜間・土曜日を利用して先生に指導をいただきながら研究を進めている。平日も休日も考古学漬けの毎日である。もともと「何となく楽しそうで」考古学の扉をたたいた私がここまで考古学にハマってしまったのも、ともに発掘で汗をかいだ仲間や素晴らしい先輩・そして先生方との出会いがあったからだと思う。早稲田大学考古学研究室では、そんな素敵な出会いがあなたを待っている。